支え合いマップづくりで
見えてきた－地域の助け合い

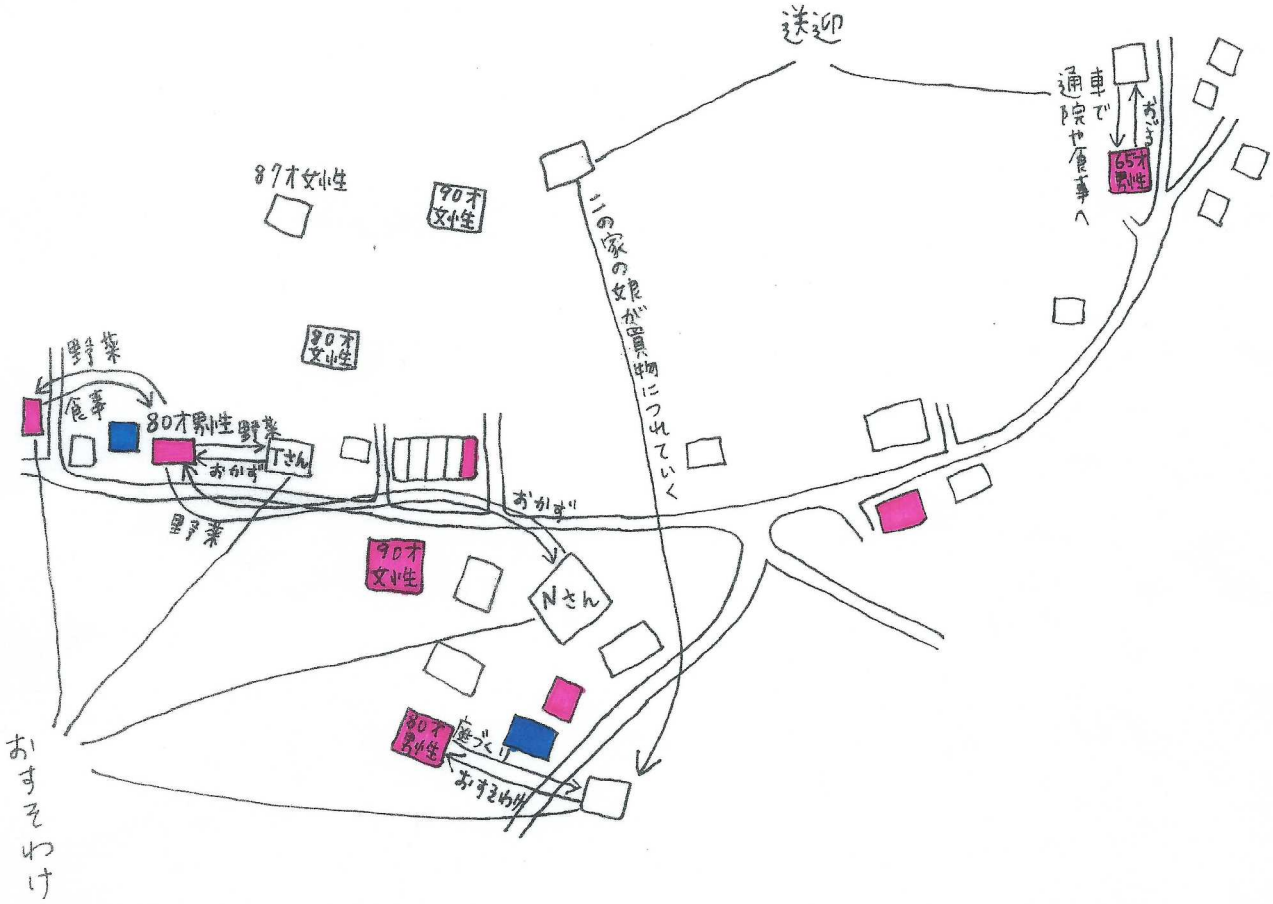
魔法の虫眼鏡

★支え合いマップは住民流福祉総合研究所が２０数年前、地域の実態把握のツールとして開発したものです。
★やり方は簡単です。特定の地域（およそ 50 件）を選び、そこに在住の主婦等に集まってもらい、気になる人やその人に関わっている人などを探し出し、関係の線を引いていくのです。
★マップ作りを通して、人々は５０件程度でまとまって、ふれあい助け合っていることがわかりました。ここを私どもは「ご近所」と命名し、このご近所福祉の推進こそが、要援護者が最も望んでいることだとわかりました。
★マップづくりは「ご近所福祉」の取り組み課題を抽出するためのもので、出てきた課題をそこのご近所さん主体に取り組んでいただくのです。
★とりあえずは、支え合いマップづくりでどういう事実が見えてきたのかを、ご覧ください。支え合いマップを作ったからこそ見えてきたご近所の素顔。まさにマップは「魔法の虫眼鏡」と言ってもいいでしょう。

住民流福祉総合研究所（木原孝久）
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷１４７６－１
ｈｔｔｐ：／／ｊｕｍｉｎｒｙｕ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

ご近所で配食も送迎も

★支え合いマップをつくると、人々は約５０世帯の「ご近所」でふれあい、助け合っていることがわかる。
★ピンク色が一人暮らし高齢者。青色が老々世帯。
★下のマップでは、４人が隣人におすそ分けをしていた。必ずお返しがなされているのも住民の特徴だ。
★また２人が送迎をしていた。
★いま「生活支援」が盛んだが、ご近所毎に実行されていた。

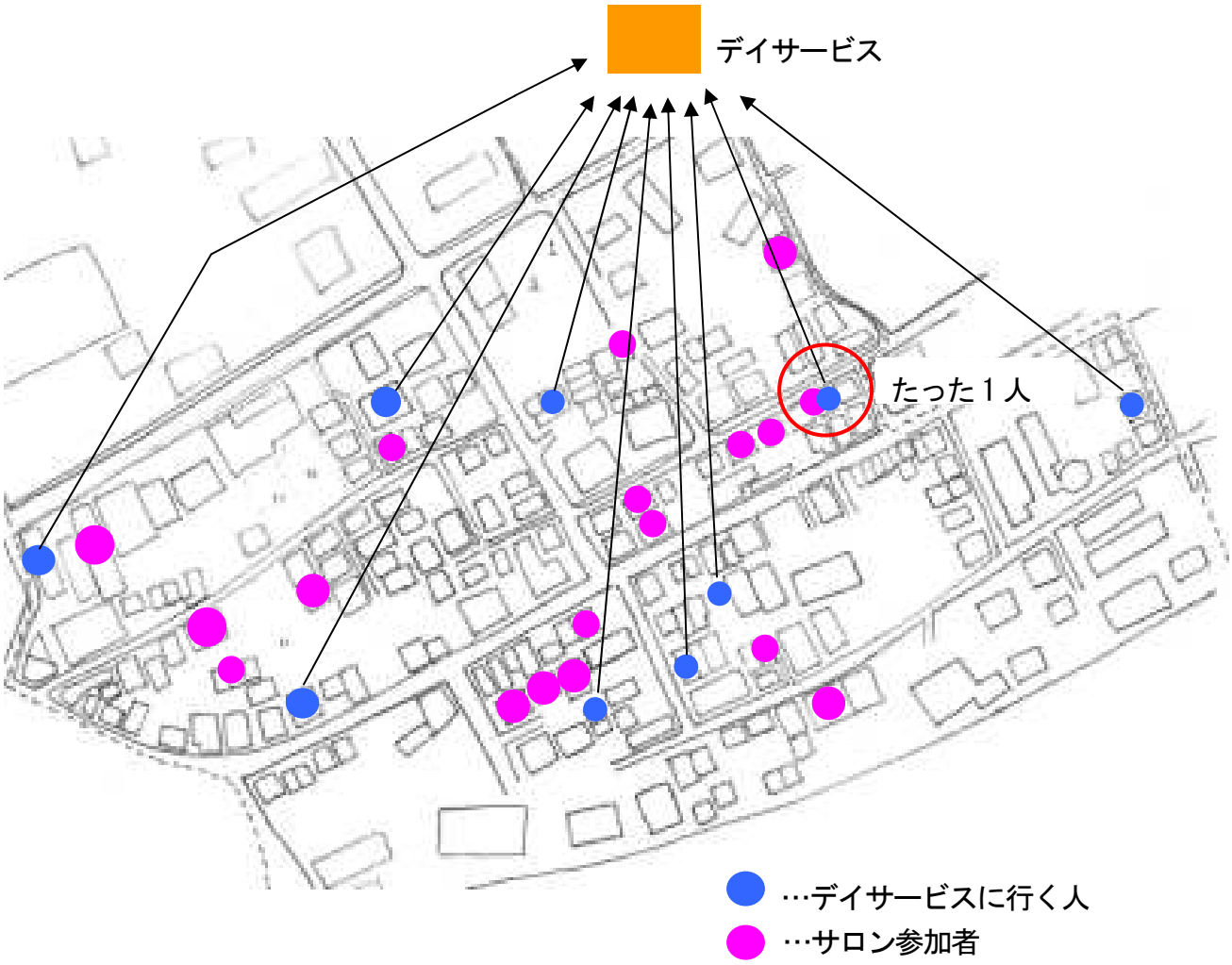


新旧住民、繋がっていた

★郊外では新住民と新住民があまり交流していないのが悩みの一つだ。
★この地区でも同様で、町内会長は（マップ下部の）新住民が上部の旧住民に溶け合わないと嘆いていた。
★個人的にはどうか。Ａさんに尋ねたら、この３人（青色）に畑を貸していた。一人暮らしのＢさんは、この３人（青色）と犬の散歩友達になっていた。
★すると町内会長、「そういえば俺、彼らと子ども会でつながっていた！」

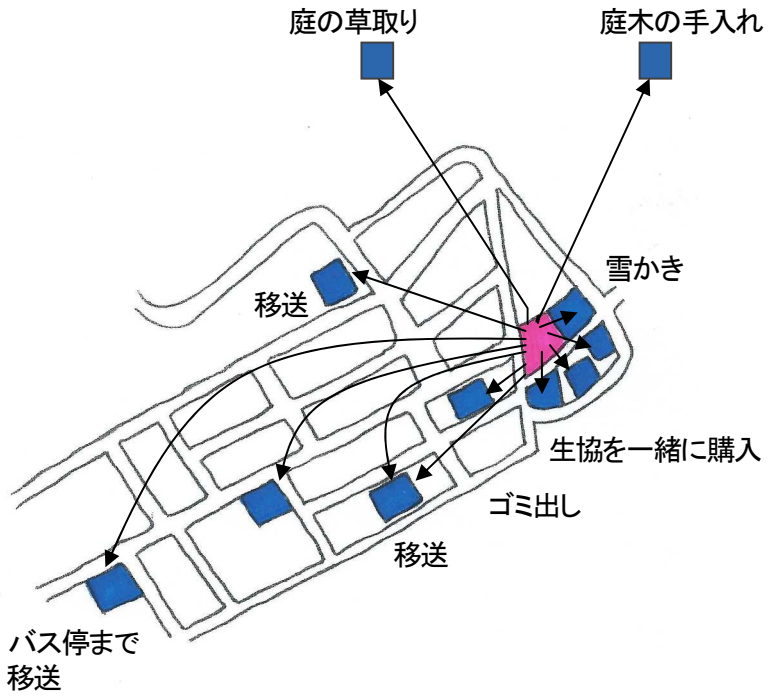
私達は元気な人の集まり

★ふれあいサロンのメンバーとマップ作りをした。
★まずメンバーの家にピンク色の印を。
★「この地区でデイサービスを利用している人は？」と聞いたら青色の通り。
★２つの色が重なっている人、つまりデイサービスを利用してもサロンに行っている人は、たったの一人。
★なぜかと聞いたら、「私たちは元気な人の集まりなの」。
★地域は元気な人と要援護の人が、きれいに棲み分けられていた！



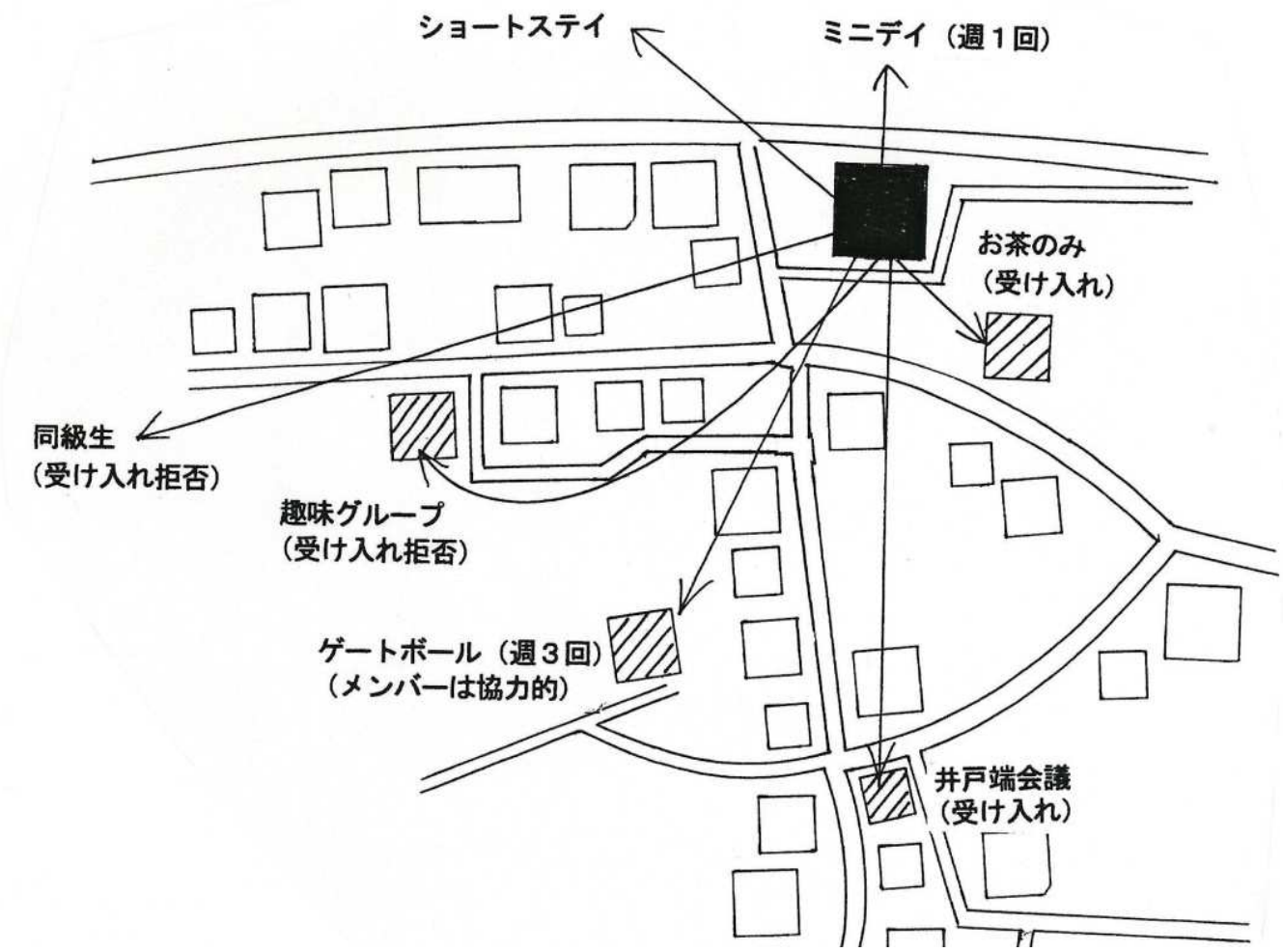
助けられ上手さんがいた

★ご近所でマップを作ると、住民の意外な行動が浮かび上がってくる。
★要介護の夫婦（青色）がご近所の人に、いろいろお願いをしていた。
★あなたはゴミ出しを、あなたは庭木の手入れを、あなたは雪かきを。
★送迎をお願いする時は有償でと、区分けをしていた。
★ご近所の利点は、狭い領域なので、当事者が助け手を確保できることだ。
★ご近所では当事者は福祉の主役として行動しているところが興味深い。



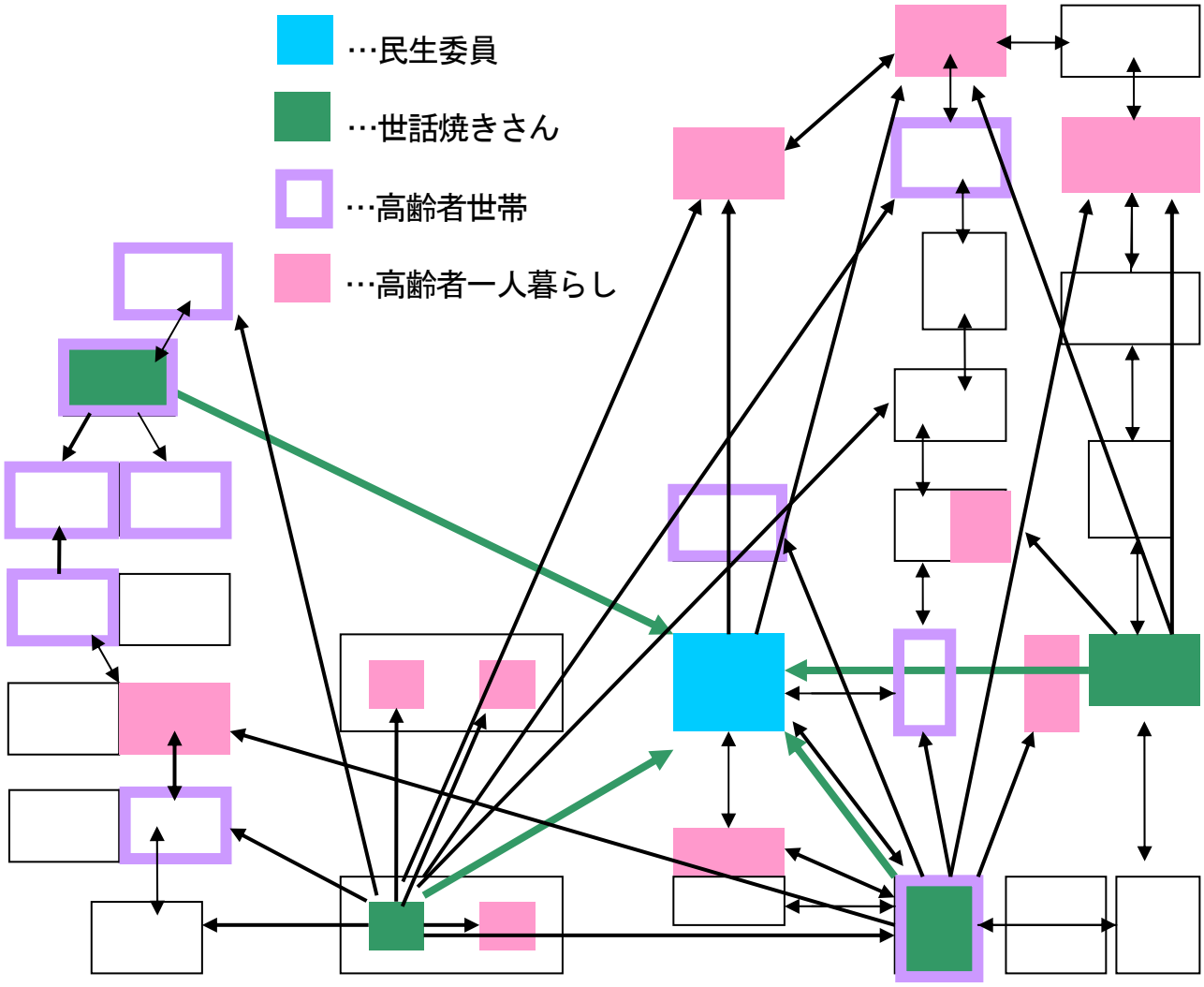
ご近所で自分らしく生きたい

★認知症の女性。毎日ご近所内を歩き回っている。よく調べてみたら…
★昔の同窓生宅に行くと「来ないで！」と言われる。
★仲間と趣味活動している家では「お嫁さん、お母さんを寄越さないで！」
★ゲートボールのグループは受け入れてくれる。
★井戸端会議（小サロン）は受け入れてくれた。
★お茶のみグループも受け入れてくれた。
★担当のケアマネジャーは「危ないから老人ホームに入りましょう」。
★この全部が受け入れれば、彼女はご近所で自分らしく生きることができる。
★これが福祉の理想なのでは？



大中小世話焼きが連携

★ご近所は世話焼きさんの活躍の舞台。人の面倒をみる天性の資質の持ち主。
★民生委員（中央青色）が自宅周辺のマップを作った結果がこれ。
★１０人程度の面倒を見るのが大型（最下段の緑色）。５，６人が中型（中段の左端と右端の緑色）。その他が小型。
★特に彼が驚いたのは、一人暮らしの人と老々世帯のすべてに、２、３本の線が入っていることだった。
★「足元では助け合いは全くしていないと思っていた」と民生委員。

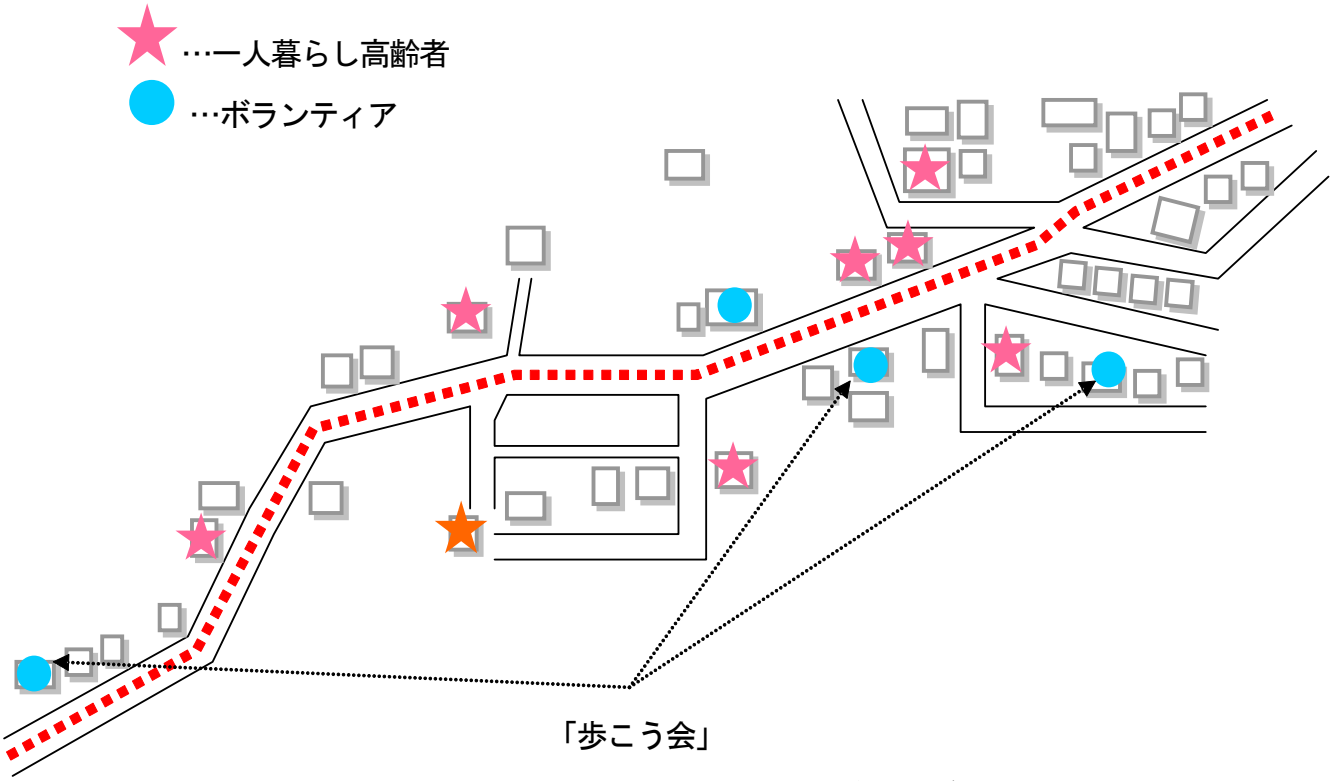


超大型世話焼きさん

★概して世話焼きさん（大中小）はご近所で活躍している。いわゆる第一層（市町村）、第二層（校区）、第三層（自治区）は広すぎて手が出にくい。
★ところが、数百世帯の第三層でも活躍している超大型世話焼きがいる。
★彼女（ピンク）の動き方はこうだ。まずご近所を歩いて気になる人（★印）を見つけたら、その周辺の人（点線）に見守り等をお願いする。
★もう一つは、世話焼きさん（青色）を探し出しては、その周辺の人たちへの関わりをお願いする。
★普通の世話焼きは単に人の面倒を見る人、超大型は人を生かせる人。この人がいると、ご近所と上の層（生活支援コーディネーター等）が繋がる。

「ながら」見守り

★住民の活動は「普段の生活の中で」が基本原則。意図的な活動にはしない。
★一本の道路に住民がへばりつくように生きている。一人暮らしの人も。
★こういう場合に住民はどのように見守りをするのか。
★左端の人（青色）が語り始めた。毎日、夕方になると、「歩こう会」のメンバー３人が左端に集合し、道路を右に向かってウオーキング。その間にさりげなく一人暮らしの人の様子をうかがう。
★右端まで来たら、その先に住む民生委員に報告して解散だ。

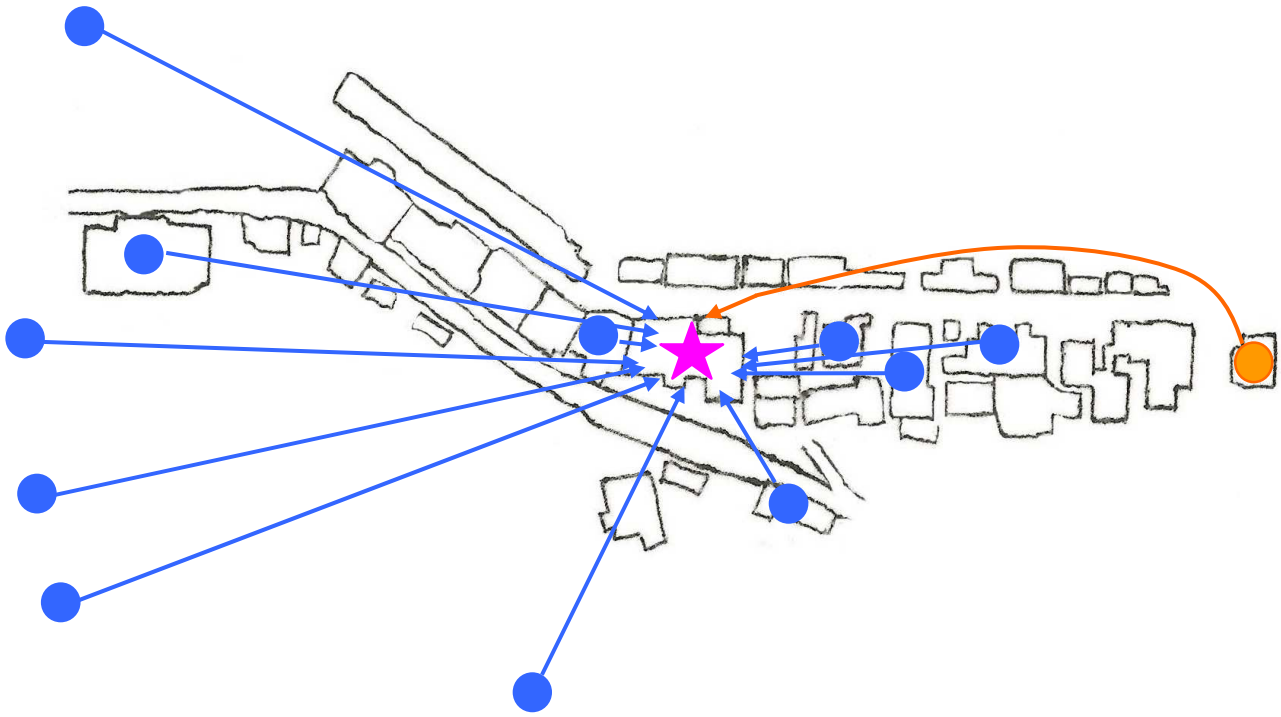


「歩こう会」

→毎日、この辺りを散歩しがてら見守り

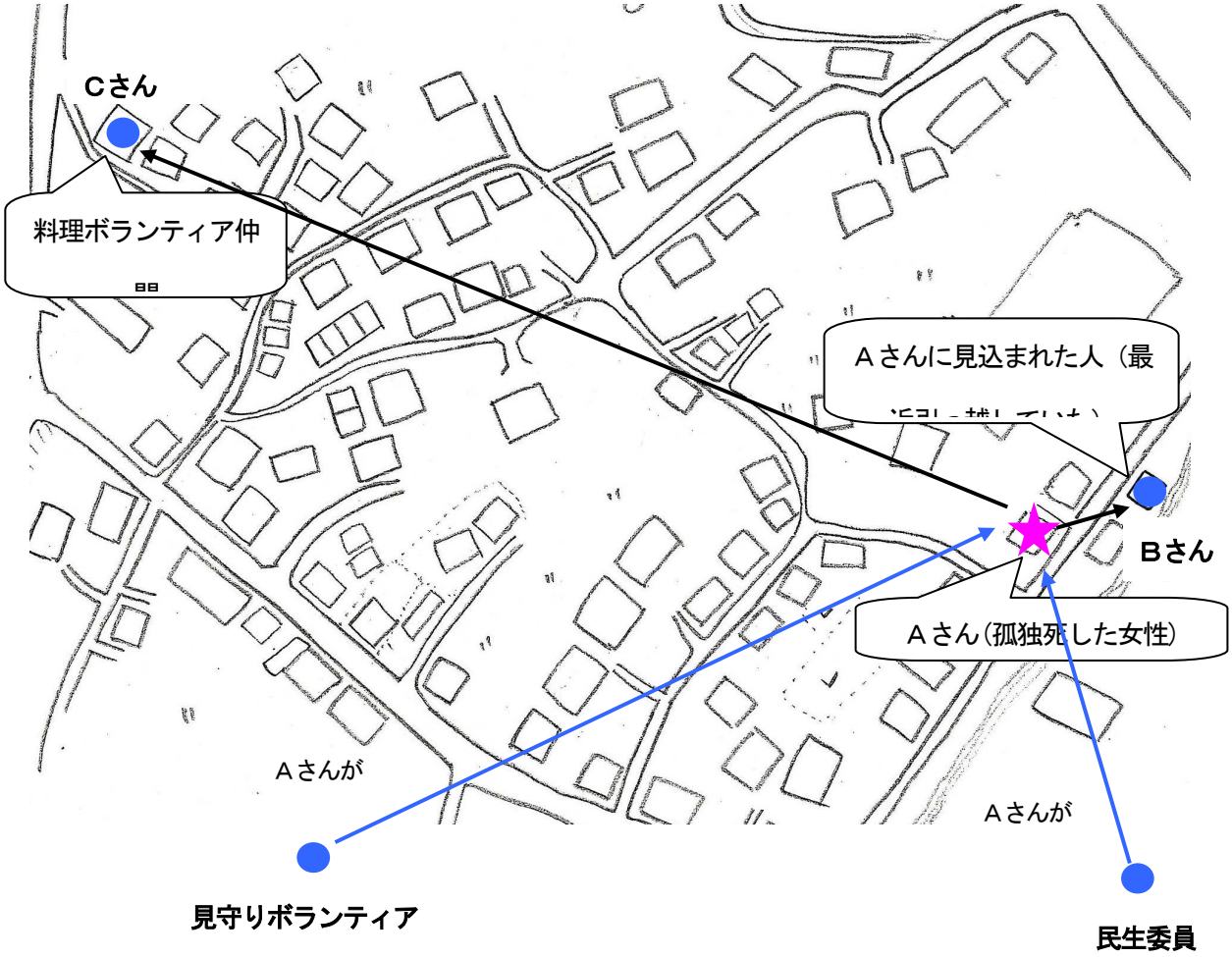
なぜ助け手の悪口を？

★小規模多機能施設が、利用者の一人（★印の女性）に地域の人とどのように交流しているかを調べてみたら、なんとこれだけの人が関わっていた。見守りからおすそ分けを持ってくる人まで１１人。
★ところが彼女はこの１１人の人たちの悪口を言っているという。
★では彼女が悪口を言わない相手がいないのか。一人いた（黄色の人）。
★この人は何をしに来ているのか。当人（★印）を買い物やレストランに誘って、高い買い物をさせていた。
★食い物にされているのに、悪口どころか、こう言っていた。「あの人は可哀想な人なの。私が面倒を見てあげているのよ」



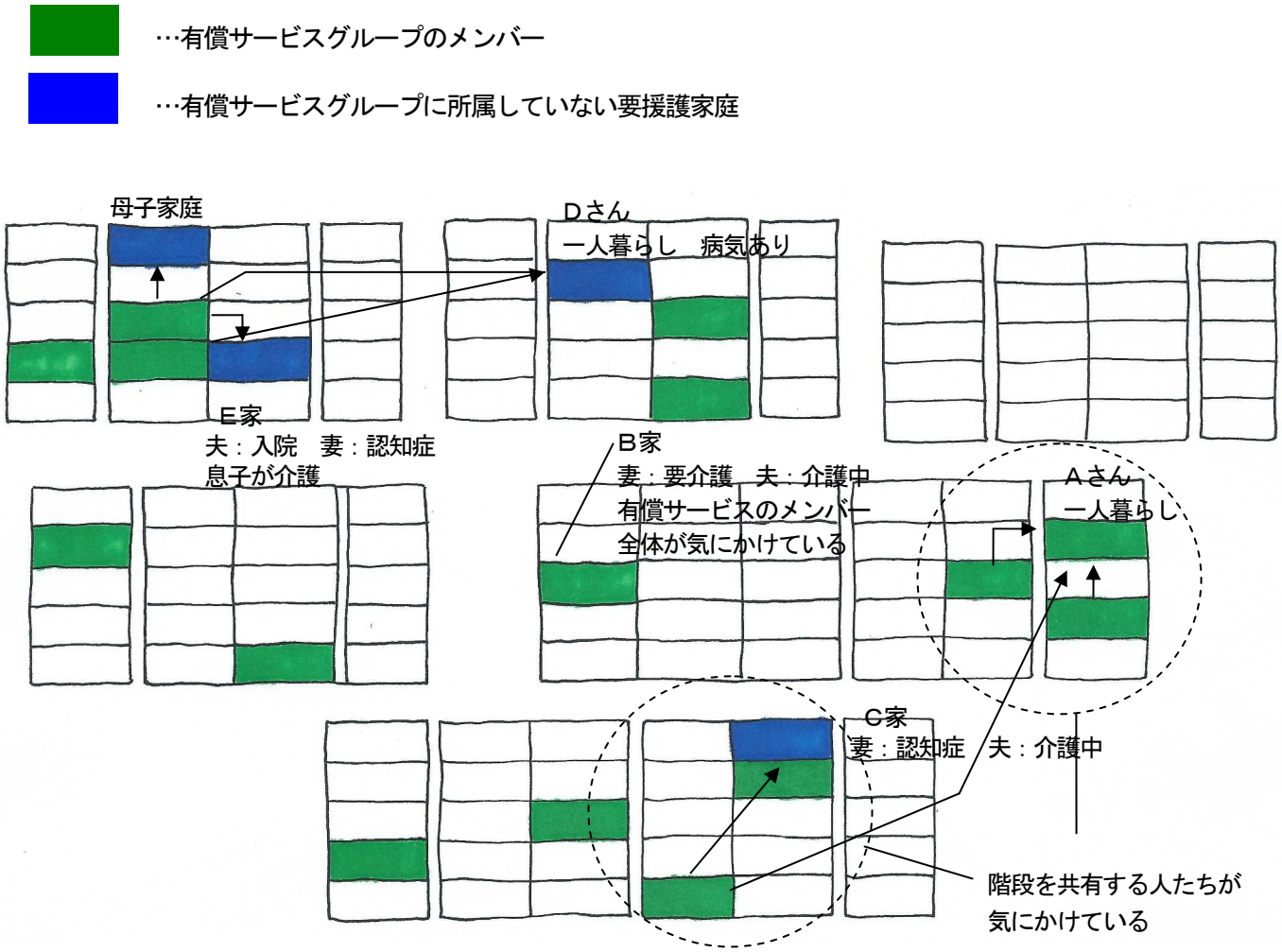
見守る人は私が指名する

★死後二週間で発見された一人暮らし女性（★印）。
★民生委員が訪問しても戸を開けなかった。ボランティアも拒否。
★本当に彼女は誰とも接触していなかったのか。町内会の人たちに聞くと…
★彼女が見込んだ相手が２人いた（青い丸印）。特に道路を隔てた相手には「何かあったらお願いね」とまで言っていた。
★なのになぜ亡くなったのか。右の人が最近引っ越していた。
★住民の流儀だと、見守る人は当事者が見込むのだ。見込まれなかった民生委員が、右の人と繋がりを持っていれば、事態は変わっていたかもしれない。



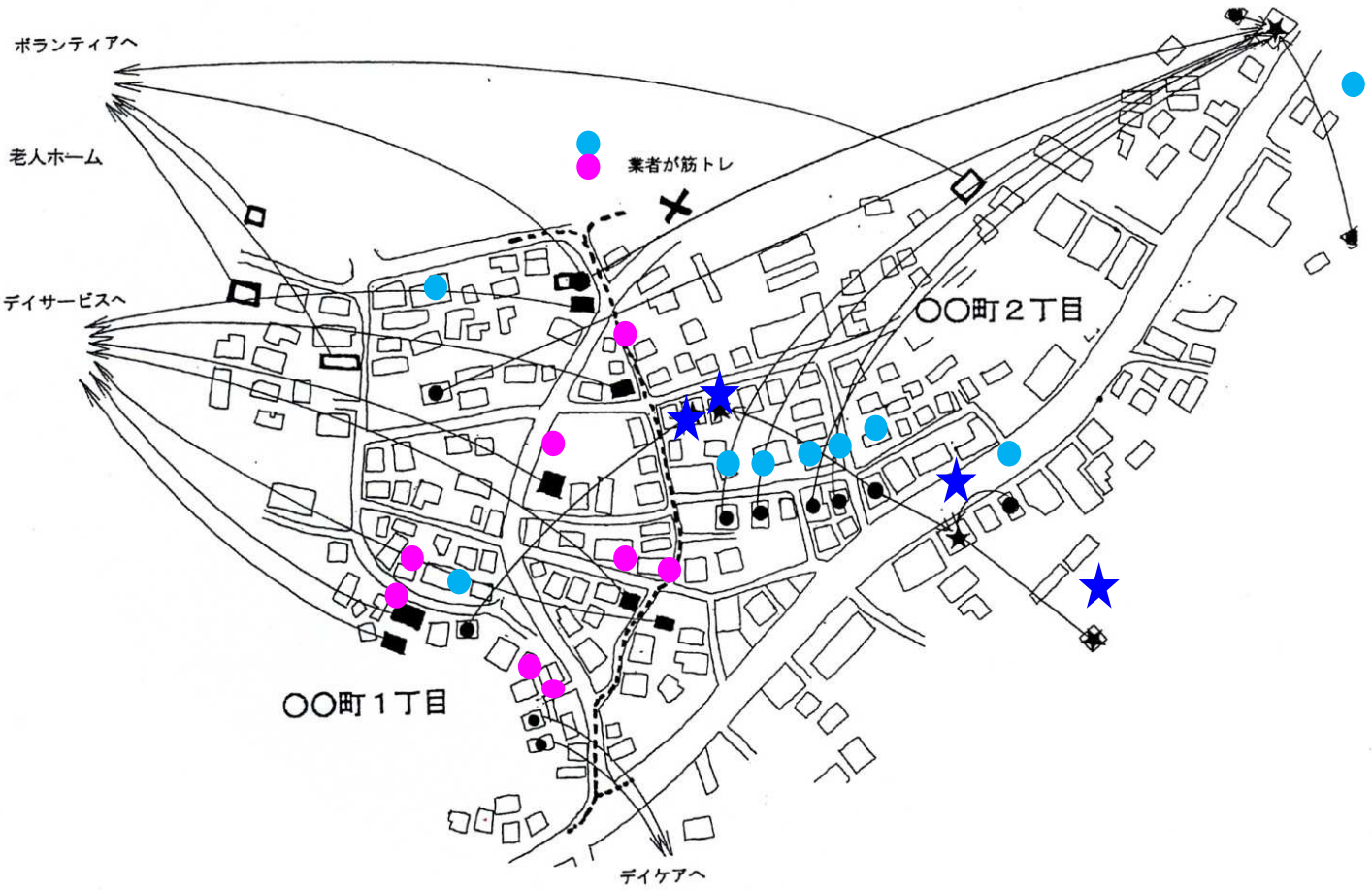
ご近所に戻って助け合い

★有償の家事援助サービスの仲間がご近所に戻って助け合いをしていた。
★緑の家が有償グループのメンバー。仲間には一人暮らしの人や、家族を介護している人もいる。彼らを仲間が支援していた、むろん無償で。
★それだけではない。メンバーでない要援護の人（青色）の面倒も見ていた。
★ご近所で助け合いを起こすには、こういうやり方を取ればいいという好例。



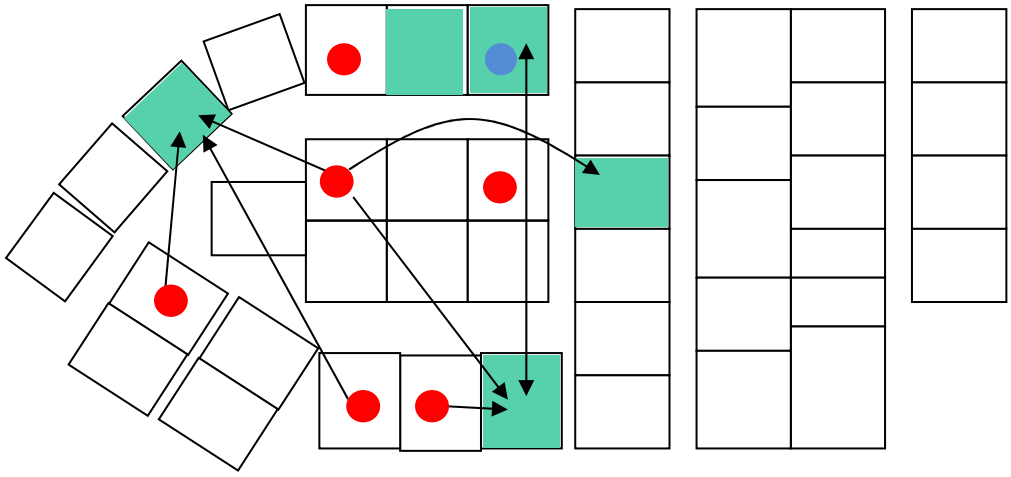
なぜデイ利用は一丁目？

★奇妙なマップである。左側が一丁目で、右側が二丁目。
★デイサービス利用者（ピンク色）は大部分が一丁目の人だ。
★右の人はなぜデイを利用しないのか。こちらでは小サロン（青い星印）があちこちで開かれていた。その参加者がブルーのいろ。
★一丁目でも小サロンを開けば、デイ利用者は減るのではと思われる。その資質のある人が、一丁目では施設にボランティアに行っていた。
★さて、本当の福祉のあり方は？



介護経験者の大きな役割

★マップで、家庭で介護中の人が４件あった。
★これを誰か支援していないかと調べてみたら、たしかにいた。家庭介護を経験した人が６名いて、その人たちが現役をサポートしていた。
★元看護師も１人いた（青い丸）。マップ作成後にこの人に個人的に聴取してみたら、彼女がこのご近所内のほとんどすべての人の健康相談に乗っていた。看護師が世話焼きさんだと凄い福祉・医療資源になることがわかった。



…介護中の家庭（線は関わる人）。介護経験者●がサポートしている。

●は元看護師。